

マーサー・ジャパン株式会社
今井 俊夫

第18回 「株式投資の「スタイル」」

「株式投資の「スタイル」」

日経平均株価が34年前につけた最高値を更新したことがニュースになりました。一般的に目にする日経平均株価は、期中に受け取る配当金を含まない指数なので、「34年前に買った株がようやくトントンになった」というわけではありません。34年前の値に復したことの解釈はさまざまですが、象徴的な出来事ではあり、今、日本株が買われている勢いを示唆しているのは間違いありません。

ところで、本当に一つ一つの株価が上昇しているのでしょうか。株式投資をされている方の中には、「自分の保有銘柄はちっとも上がっていないので違和感がある」という方も、少なからずいらっしゃるのではないのでしょうか。東証株価指数、TOPIXで見ると、年初来の上昇率は12.4%ですが、このうち時価総額と流動性の高い上位30銘柄で構成されるTOPIX Core 30の上昇率が17.4%である一方、逆に時価総額と流動性の高い上位400銘柄を除いたTOPIX Smallは6.5%にとどまっています。最近の株高に違和感のある投資家は、トヨタ自動車(35.9%)、三菱UFJフィナンシャル・グループ(23.0%)のような大企業ではなく、今はまだ小さいが成長を期待できる企業に好んで投資しているのかもしれません。

株式投資には、それぞれスタイルがあります。日経平均株価のような指数どおりが間違いないと思う人、誰にも知られていない成長企業を見つけることでホームランを狙う人、配当利回りの高い銘柄を好む人、株主優待目当ての人もあります。市場環境によって、それぞれのスタイルが報われるときもあれば、報われないときもあるのです。年明け以降の上昇相場には乗れていない投資家も、過去には、相場の悪いときに持ちこたえてくれた、というようなことがなかったでしょうか。

銘柄選択の専門家である運用会社にもさまざまなスタイルがありますが、受託者責任を負った基金が運用会社を選択する視点は、「市場平均を上回ることができるか」に尽きます。時流に合わせてスタイルを乗り換えるのは現実的ではありませんので、短期的に報われないことがあっても、長期的には市場平均を上回る、力のある運用会社を選んで結果を待つのです。スタイルの異なる運用会社を複数採用すれば、スタイルに起因する短期的な浮き沈みを緩和することもできます。基金でも複数の運用会社を採用していますが、複数組み合わせた結果、市場平均並みにならなってしまうよう、各スタイルで力のある運用会社を選ぶよう努めています。